The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

大乗経典の結集者をめぐる一伝承

人見牧生

Ⅰ．はじめに　大乗経典を対象とした註釈文献は数多く存在する．それらの文献群は，かつて大乗経典がどのように捉えられていたのかのを知るための手掛りを我々に与える．そうした手掛りの一つが，大乗経典を結集（saṃgīti）によりもたらされたものとみなす記述である．インドの註釈者たちは，阿含経典と同様に，大乗経典の起源をも結集に求める．さらにその結集に関与した結集者(saṃgītikāra)としてVajrapāṇi，Maitreya，Mañjuśrīなどの大乗系菩薩を挙げる．こうした記述がそのまま史実に対応するとは考え難いものの，註釈者たちの経典成立観を知る上で興味深い．かつてこの点に着目したのはÉtienne Lamotte教授である[1]．本稿では教授の研究を承け，結集者をめぐる伝承を取り上げる．

Ⅱ．『プトゥン仏教史』の記述　註釈文献に先立ち，インド由来の結集記事に関して明確な記述を残す*Bu ston chos 'byung*を引用しておく．同書は大乗仏典の結集について次のように記す．

> 第二．大乗の方法とは，ラージャグリハの南方〔にある〕ヴィマラスヴァバーヴァという山に，百万の菩薩が集い，Mañjuśrīが阿毘達磨を，Maitreyaが律を，Vajrapāṇiが経を結集した，と言われる．*Tarkajvālā*にも，
>
> > 大乗は仏の所説である．〔なぜなら〕根本結集者である*Samantabhadra，*Mañjuśrī，*Guhyakādhipati（*Vajrapāṇi），*Maitreyaをはじめとする者たちによって結集されたからである．我々の根本結集者は声聞ではない．大乗の教説はかれら（声聞）の対象ではないからである．(TJ, P Dza 180a2-4 ; D Dza 166a4-5)
>
> と説かれている．また『十万〔頌般若〕の註釈』(*'Bum ṭī ka*)においても，Vajrapāṇiは千仏の教えを結集した者であると［*Tathāgata-*]*acintyaguhya*[*nirdeśa*]に説かれ，*Vajrapāṇyabhiṣekatantra*にもVajrapāṇiが結集者であると説かれるから，Vajrapāṇiは*Maitreyaをはじめとする〔菩薩〕達に，「このように〔わたしは聞いた〕」と結集したと認められるのである．(*Bu ston chos 'byung*, 813.3-7)

このようにプトゥン（1290-1364 A.D.）は，*Tarkajvālā*（TJ, P. No.5256 ; D. No.3856）に基づいてMañjuśrī，Maitreya，Vajrapāṇiがそれぞれ大乗の三蔵を結集したとし，*'Bum ṭī ka*に基づいてVajrapāṇiが大乗経典の結集者だと記す．ただしその記述は

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

断片的であるため，実際にインドにおいていかなる伝承が存在したのかは不明である．そこで次節以下，プトゥンが依拠した文献に遡り，大乗独自の結集者に関する記述を辿ってみることにする．

Ⅲ．大乗仏説論と結集者　プトゥンが最大の典拠とするTJ当該箇所は，大乗仏説論を論ずる同論第四章に位置する（Ⅳ-8註釈箇所）．具体的には，非仏説論者による「（根本）結集者によって結集されていないから，大乗は十八部派に属していない（がゆえに仏説ではない）」との批判（前主張）に対する反論（後主張）である．ここで仏説論者が用いる論拠は「『隠没』経の理論」「根本結集の消失」であるが，特に前者の論拠においては批判の矛先が阿含経典の結集者とされるĀnandaに向く．というのも仏説論者は，Ānandaが待者（upasthāyaka）であったのは釈尊の晩年に至る約25年間である点に基づき，待者となる以前の，空白の約20年間になされた（= Ānandaの受持していない→結集者によって結集されていない）法蘊に，大乗経典を位置づけようとする．したがってĀnandaの結集者としての適性が批判の俎上に載せられる．そうした議論の延長上においてTJは大乗独自の結集者を擁立する．それがプトゥンの引用する箇所である．しかしTJ自身はこの点についてこれ以上深く言及しない．したがって大乗仏説論の観点から，結集者に関する伝承を掘り下げることは難しいように思われる．

Ⅳ．Vajrapāṇiを結集者とみなす解釈　一方で大乗独自の結集者を立てる例は，8世紀以降の註釈文献にみられる．註釈者たちは，経典の冒頭句“evaṃ mayā śrutam ekasmin samaye”のうち，mayā註釈箇所で結集者に言及する．その際，大乗独自の結集者として最も多く採用されているのはVajrapāṇiである[2)]．

ダンシュトラセーナ　TJに次いでプトゥンが典拠とする*'Bum ṭī ka*，即ち*Bṛhaṭṭīkā*（P. No.5205 ; D. No.3807）も，『十万頌般若』の結集者としてVajrapāṇiを挙げる．註釈者ダンシュトラセーナ（8-9th c.）は次のように述べる．

> 如来たちの色身と正法身とを護る〔権限が〕属するから，聖者であるVajrapāṇi菩薩に向かって，聖者Maitreyaが，会衆の中で問いかけると，〔Vajrapāṇiは〕「**このようにわたしは聞いた**」といって，〔世尊が〕お説きになられたこの般若波羅蜜多を，「わたしが聞いた」と了承された．（P Na 2a1-4 ; D Na 1a2-4）[3)]

如来を護衛する役割を担うVajrapāṇiが，Maitreyaの勧請に応えて般若経を説いたという．しかしプトゥンの言及する二つの経典は典拠として援用されていない．*Bu ston chos 'byung*の記述はむしろ*Abhisamayālaṃkārālokā*（AAA）に一致する．

ハリバドラ　AAAの中でハリバドラ（8-9th c.）は，『八千頌般若』の結集者につ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

いて次のように述べる．

> *Tathāgataguhyanirdeśa* によれば，あらゆる面で，賢劫に属する如来全員の色身と正法身とを護る権限が与えられているから，*Vajrapāṇyabhiṣeka* などでは，〔世尊から Mahāvajradhara に〕教説が付託されているから，諸他〔の者〕には特別なことばが〔付託されてい〕ないから，アダカヴァティに住し，十地の主である大持金剛（Mahāvajradhara）が，あらゆる世間を利益するため，般若波羅蜜という経宝を合誦するよう勧請した，聖者 Maitreya をはじめとする，偉大なる菩薩からなる集団に対して，evam［mayā śrutam］云々と語った，と先代の規範師たちは〔言っている〕．一方，他の者たちは，同じこ〔の『八千頌般若』〕の中の「委託」章（嘱累品）に，**ジャンブー州においてこの般若波羅蜜が流布する**云々によって，般若波羅蜜が付託されていることから，結集者は聖者 Ānanda であると考えている．（WOGIHARA 5.6-13）

mayā が一体誰を指すのかについて，ハリバドラは二つの解釈を示す．一方は先代の軌範師たち（Pūrvācāryāḥ）の解釈で，Maitreya の勧請に応えて Mahāvajradhara 即ち Vajrapāṇi が般若経を説いたとみなすもの．この解釈の典拠とされるのが，『宝積経』第三会に相当する初期大乗経典 *Tathāgataguhyanirdeśa* と，『華厳経』「入法界品」との連続性をもつ *Vajrapāṇyabhiṣeka* である．前者はおそらく Vajrapāṇi を主人公に抜擢した最初の経典であるが，そこでは，釈尊が前世において燃灯仏から授記を受けたとき以来，Vajrapāṇi は常に侍者として仕えてきた人物として描かれている[4]．後者では釈尊から教説を付託されてもいる[5]．こうした背景から，この菩薩は Ānanda に比肩し得る人物として結集者に抜擢されたものと推測される．

他方の解釈は，経典末尾の記述に基づき，Ānanda を結集者とみなすものである．この解釈は『八千頌般若』の最終章に置かれる，釈尊が Ānanda に法門を委嘱する経文を直接の典拠とする．解釈の提唱者は明示されていないが，最も一般的な解釈といえる．

なお，プトゥンによっては律の結集者に擁立されていた Maitreya は，ここでは Vajrapāṇi に説法を勧請する役割を担っている．『現観荘厳論』に代表される般若経の解釈学の伝統ではその始点に位置づけられる Maitreya が，説法の勧請者及びその最初の聴聞者とみなされている点は興味深い．

ラトナーカラシャーンティ　さて，ハリバドラやダンシュトラセーナの示す解釈は，AAA と同じく『八千頌般若』の註釈である *Sāratamā*（P. No.5200 ; D. No.3803）にも踏襲されている．著者であるラトナーカラシャーンティ（11th c.）は次のように述べる．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

【問】当該〔経典〕における結集者は誰か？【答】それはアダカヴァティに住するVajrapāṇi菩薩大士である．賢劫に属する一切如来の色身と法身を護る権限をもっているから，主として認められている．*Vajrapāṇyabhiṣekasūtra*では〔Vajrapāṇiに〕教説が付託されている．また，かの聖者Ānandaに〔教説が〕付託されているのは，声聞が世間の人々を招き入れるべきだからであるが，結集のためではない．常に世尊に付き従っていたことから，聖者Ānandaは余すところのない聞を得たので，声聞蔵（*śrāvakapiṭaka）の結集者なのである．同じ様に，Vajrapāṇiは菩薩蔵（*bodhisattvapiṭaka）の結集者である．〔理由は〕以上で充分である．現等覚仏から，法を説く説示者より，こ〔の法門〕を自分自身が聞いたから，結集〔者〕である．したがって，結集者は〔自身が結集者であると〕明示するために，**聞いた**（**śrutam**）と言われる．（P Tha 4a6-b2 ; D Tha 3b7-4a3）[6)]

当該箇所の記述はAAAのそれと多くの点で共通する．だがハリバドラの見解からさらに一歩踏み込んで，Ānandaを声聞蔵の結集者へ，Vajrapāṇiを菩薩蔵の結集者へと分類している．ラトナーカラが用いる限りでの声聞蔵とは阿含経典全体を指し，菩薩蔵とは大乗経典全体を指すものと思われる．

以上，般若経に対する三つの代表的な註釈文献から用例を確認した．ただしVajrapāṇiを結集者とみなす見解は他の註釈文献にも認められる．例えばマンジュシュリーキールティ（10th c.）も*Samādhirāja*の註釈である*Kīrtimālā*（P. No.5511 ; D. No.4010）の中で同様の見解を示す（P Nyi 2b6-7 ; D Nyi 2b1）．*Prajñāpāramitāhṛdayārthaparijñāna*（P. No.5223 ; D. No.3822）においてもシュリーマハージャナ（11th c.）が言及しており（P Ma 338b7-8 ; D Ma 304a2-3），ジャガッダラニヴァーシン（Jagaddalaの居住者？）と呼ばれる註釈者も*Bhagavatyāmnāyānusāriṇīvyākhyā*（P. No.5209 ; D. No.3811）の中で言及する（P Ba 2b2-4 ; D Ba 2a2-3）．一方で，他の菩薩を結集者として擁立する向きもあったようだ．というのも*Avikalpapraveśadhāraṇīṭīkā*（P. No.5501 ; D. No.4000）においてカマラシーラ（8th c.）が（P Ji 148b8-149a3 ; D Ji 124b5-7），また*Prajñāpāramitāhṛdayavyākhyā*（P. No.5218 ; D. No.3819）においてジュニャーナミトラ（8-9th c.）が（P Ma 303b3-4 ; D Ma 281b5-6），それぞれMañjuśrīを結集者としている．両書ともMañjuśrīに言及しない経典に対する註釈書であるため，つまり当該経典内の経文に典拠をもたないため，全く別の伝承に基づき結集者を選定したことになる．さらに『大智度論』の最後部では，ある者の説として，Mañjuśrī，Maitreyaの両名がĀnandaとともに大乗経典を結集したと述べられる（No.1509, T25, 756b15-16. Cf. É. Lamotte, *Traité II*, p.941, note1.b）．したがって大乗系菩薩を結集者とみなす伝承は広範囲に流布していたことが予想される．

V．おわりに　大乗系註釈文献からみる限り，8世紀からインド仏教の最後期

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

に至るまで，Vajrapāṇi あるいは Ānanda が大乗経典の結集者であるとの伝承が最も有力であった．両者はともに釈尊の侍者であった（と目されていた）点で共通する．Vajrapāṇi を結集者の地位にまで押し上げた典拠は，ハリバドラとプトゥンによれば，*Tathāgatācintyaguhyanirdeśa* 並びに *Vajrapāṇyabhiṣekatantra* である．そうした伝承とは系統を異にして，Mañjuśrī を結集者として擁立する向きもあった．以上の諸点から，大乗系菩薩を結集者として擁立する伝承がかつてインドに存在したことが窺える．

略号　AAA：WOGIHARA Unrai (ed.), *Abhisamayālamkār'ālokā Prajñāpāramitāvyākhyā*, 1932-1935 ; *Bu ston chos 'byung* : L. Chandra (ed.), *The Collected Works of Bu-ston*, Part 24 (Ya), Śata-piṭaka Series vol.64, 1971.

1）*Le Traité de la Grande Vertu de Saggesse de Nāgārjuna (Mahāprajñāpāramitāśāstra)*. Tome Ⅱ, Bureaux du Muséon, Louvain, 1949, pp.939-42, note 1.b.　2）夜叉（初期仏教期）から菩薩へと格上げされ（大乗期），最終的に神格化された（密教期）という希有な変遷を辿ったこのキャラクターについては É. Lamotte, "Vajrapāṇi en Inde," *Mélanges de sinologie offerts à Monsieur Paul Demiéville*. Presses universítaires de France, Paris, 1966, pp. 113－159 が詳細に論ずる．　3）同著者による *Śatasāhasrikāpañcaviṃśatisāhasrikāṣṭadaśa sāhasrikāprajñāpāramitābṛhaṭṭīkā*（P No.5206 ; D No.3808）にも全くの同文がみられる（P Pha 2a1-4 ; D Pha 1b3-4）．　4）Lamotte1966 : 147, note（6）が直接の典拠として指摘する箇所は『佛説如來不思議祕密大乘經』（No.312, 法護訳），T11, 747a22-26 である．

5）*Vajrapāṇyabhiṣeka*（P. No.130 ; D. No.496）では，釈尊が Samantabhadra に対して行う金剛手灌頂を契機として，Samantabhadra が Vajrapāṇi 菩薩へと転換（変身）する．ハリバドラが典拠とするのは，Vajrapāṇi の前身としての Samantabhadra が釈尊から教説を付託される以下の箇所であると思われる：「また，かの世尊釈迦牟尼は・・・金剛手大灌頂によって，Samantabhadra 菩薩を灌頂して，他ならぬかれに教説を付託した．」（P Da 11a7-b2 ; D Da 11a1-4）　6）*Sāratamā* には梵文原典が存在するが，ここで取り上げる箇所は梵文写本の欠損により原文すべてを回収することができないため，チベット語訳をテキストとして用いる．当該引用箇所に対応する梵文断片は Padmanabh S. JAINI (ed.), *Sāratamā: a Pañjikā on the Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā sūtra*. Tibetan Sanskrit Works Series no.18, Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, Patna, 1979, p.4, ll.15-17.

〈キーワード〉 saṃgītikāra, 結集者, 大乗経典, Haribhadra, *Abhisamayālaṃkārālokā*

（大谷大学任期制助教）

NII-Electronic Library Service